

外務省編纂

## 『日本外交文書 第二次欧州大戦と日本』

第一冊 日独伊三国同盟・日ソ中立条約

六一書房 二〇二二・五刊

A5 七〇二頁 七〇〇〇円

本書は、『日本外交文書 第二次欧州大戦と日本』シリーズの第一冊である。第二冊目の『日本外交文書 第二次欧州大戦と日本』第二冊上・下（大戦の諸相と対南方施策）は、翌二〇一三年に刊行されている。

本書は五部によって構成され、巻末には「日付索引」が付されている。順を追ってその内容を紹介したい。

「一、防共協定の加盟国拡大と強化問題」は、防共協定の加盟国拡大、独伊による「満洲国」承認問題、防共協定強化問題等に関する一〇二点の文書を採録している。一九三六年一月に日独防共協定が締結されたのち、同協定にはイタリア、ハンガリー、「満洲国」、スペインも加わった。ヨーロッパ情勢の変化を背景としつつ、防共協定を軸に各国の思惑が移ろう、独ソ不可侵条約締結直後までの様相が見えてくる。

「二、日独伊三国同盟」は、一九四〇年九月に締結された日独伊三国同盟条約の成立経緯に関する六一点の文書を採録している。なお、日独伊三国同盟の成立経緯については、「日独伊同盟条約締結要録」と「日独伊三国同盟回顧」を所収する『日本外交文書 日

独三国同盟関係調書集』もすでに刊行されており、併せて参照可能である。

「三、日ソ中立条約」は、日ソ中立条約の成立経緯に関する文書、一〇一点を採録している。日ソ間の交渉は、国境画定問題や漁業問題、北樺太利権問題にも波及しつつ展開し、最終的に一九四一年四月、日ソ中立条約が締結された。本項目ではこの交渉過程が描かれるほか、一九四一年三〜四月の松岡洋右外相による欧州訪問、独ソ開戦をめぐる文書も所収される。

「四、独ソ開戦後の対独伊・対ソ関係」は、一九四一年六月二日の独ソ開戦から太平洋戦争開戦までの対独伊および対ソ関係に関する九〇点の文書を採録している。独ソ戦が始まると、日ソ中立条約により日本は「一応静観」の態度を保持しつつも、「撃蘇南進両略ノ態勢」の確立を方針とした（第二六八文書）。その後、再三にわたるドイツの参戦要求、独ソ戦の長期化、日米交渉の膠着のなかで、太平洋戦争開戦への道筋が浮かび上がる過程が見えてくる。

本書の最後には「参考」の項目が設けられ、「所謂防共協定強化問題（三国同盟問題）ノ顛末」と「防共協定を中心とした日独関係座談会記録」が掲載されている。前者は、一九四八年八月に総務局政務課によってまとめられた史料で、一九四一年から一九四三年にかけて執筆された有田八郎元外相による手記に、戦後極東国際軍事裁判で明らかになった事項を加筆したものである。後者は、一九四九年四月から五月にかけて、計四回にわたって行われた元外交官による座談会記録である（主な出席者に、有田八郎元外相、武者

小路公共元駐独大使、堀田正昭元駐伊大使、井上庚二郎元欧亜局長など。  
なお、本書については『外交史料館報』第二六号（二〇一二年）  
でも、その概要が紹介されている。併せて参照されたい。

（吉井文美）